

1 2	知教連  (阿久比町)	○英比小 <sup>ヤマシタ</sup> 山下 <sup>ショウキ</sup> 翔輝 東部小 林田 侑樹 東部小 茂木 章悟 草木小 大橋 美佳 南部小 竹場 貴一 阿久比中 山下 雅仁
分科会番号	1 3	分科会名 能力・発達・学習と評価

言語感覚の豊かな児童・生徒の育成  
～学年・学級の実態に応じた実践を通して～

## 1 主題設定の理由

近年、デジタル化が急速に広がり、あらゆる場面で送受信される情報量が飛躍的に増大している。情報には多くの言葉が存在し、その言葉によって知識が広がる一方、心を傷めてしまう人も少なくない。私たちは、情報社会の素晴らしさを伝えるとともに、一つ一つの言葉を大切にすることを尊さを伝えることも大切である。

小学校学習指導要領では、「言語能力の育成を図るため、各学校において必要な言語環境を整えるとともに、各教科等の特質に応じて、児童の言語活動を充実する」とあり、中学校学習指導要領では、「言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実する」とある。また、解説国語編では、目標として、言語感覚を養うことを示している。言語感覚とは、「言語で理解したり表現したりする際の正誤・適否・美醜などについての感覚」とある。言葉の意味を正しくとらえているか、適切な場面で使えているか、言葉のもつ美しさや奥深さ、尊さを感じているか。言葉をやりとりする中で、このような言語感覚があれば、相手とのやり取りが豊かになると考える。

児童・生徒にはたくさんの言葉を知り、言葉から想像を広げて感じ取ったり、思いを自分の言葉で表現したりできるようになってもらいたい。そこで、言語感覚を豊かにする手立てとして、一つ一つの言葉について考えさせるような指導に焦点を当てることにした。言語感覚の豊かな児童・生徒を育成することで、今後の予測困難な時代を力強く生きられるようにしたい、言葉を大切にできる、優しく思いやりのある児童・生徒になってほしいと思い、本主題を設定した。

## 2 研究の手立て

### (1) めざす児童・生徒像

- ①自分なりの言葉で表現しようとする児童・生徒
- ②場に応じて適切な言葉を使える児童・生徒

### (2) 研究の仮説

【仮説1】 学年・学級の実態に応じて、日々の学習や生活の中で、言葉の意味を考え、言葉のイメージを膨らませるような活動を行うことで、言葉への意識が高まり、自分の思いを言葉で表現しようという思いが高まるだろう。

【仮説2】 学年・学級の実態に応じて、日々の学習や生活の中で、相手意識をもって言葉を使うことを考えることで、場に応じて適切な言葉を使うことができるようになるだろう。

### (3) 研究の手立て

【仮説1に対して】 言葉の意味について辞典を使って調べる活動や、言葉を動作で表す動作化や音読劇、ワークシートによる学習、授業終末での振り返りを行う。

【仮説2に対して】 主に国語科において、ペアでの役割演技や、相手意識をもって課題について説明する活動を行う。

### 3 研究の実践と考察

#### (1) 英比小学校 3年生 (中心実践①)

##### ① 児童の実態

5月中旬に行った学習に関する聞き取りでは、全体の4分の3の児童が、文章を読み取ったり、言葉について考えたりする学習活動が苦手であると答えていた。また、言葉の意味を深く考えずに発言し、周りの人を傷つけてしまう児童が多く、4月初旬は言葉の取り違いによる言い合いやトラブルが多くあった。

##### ② ねらい

国語の授業で、一つ一つの言葉について考えさせる場面を多く設けた。言葉の動作化、ワークシートの工夫、毎時間の振り返りを通して、児童の言語感覚を養えるように実践をし、検証していく。

##### ③ 実践 国語科 単元名「まいごのかぎ」

「まいごのかぎ」は、かぎを拾った主人公に、不思議なことが次々に起こるファンタジー作品である。不思議な出来事の中で変化していく主人公の様子や気持ち、情景について言葉を手がかりにし、場面の移り変わりや結び付けて具体的に想像していくことが中心になる。また、言葉の豊かさが味わえる作品である。作者の多様な表現を取り上げ、児童の語感を磨いていきたいと考えた。

##### 【資料1】言葉の動作化

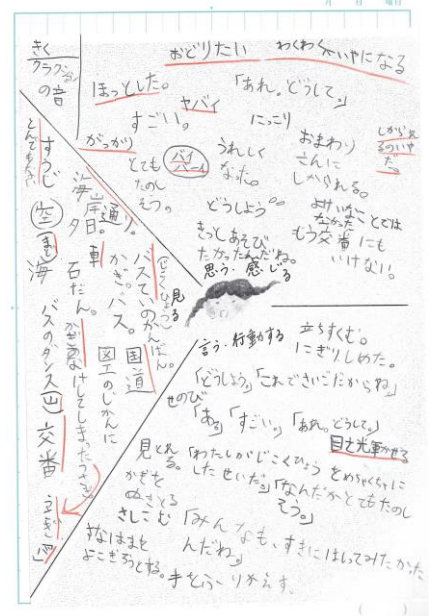
「ふわふわとうかび上がり」「ぼとりと落ちました」「あわててとびつく」などの本文の言葉に着目させ、動作化させた。また、動作を根拠に心情を説明し合う活動を取り入れた。自分たちで想像したものをジェスチャーで表現したり、友達の表現したものを見たりして、笑顔で和気あいあいと学習に取り組む様子が見られた。また、本文から心情を読み取る際に動作化することは、中学年の児童にとっては考えやすく、動作を根拠に心情を説明する活動を取り入れることで、言語活動がより盛んになった。

##### 【資料2】ワークシートの工夫

ワークシートに「見る」「思う・感じる」「言う・行動する」の3つの視点を与え、主人公について多面的に考えさせた。言葉に着目させ、それぞれの視点に当てはまるものが何なのかを確認するには有効だった。また、その後の問いかけでは、多くの児童が挙手して発言しており、視点を与えたことで考えやすくなり、たくさんの言葉に触れることができたと考えられる。一方で、情報を整理するのには有効だったが、見つけた言葉の発表だけにとどまってしまうところがあった。言葉から想像できる心情まで考えられると、より深まったものになったと思う。



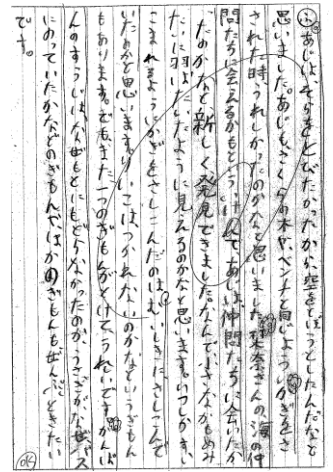
【資料1：言葉の動作化の様子】



【資料2：ワークシート】

【資料3】ノートへの振り返り

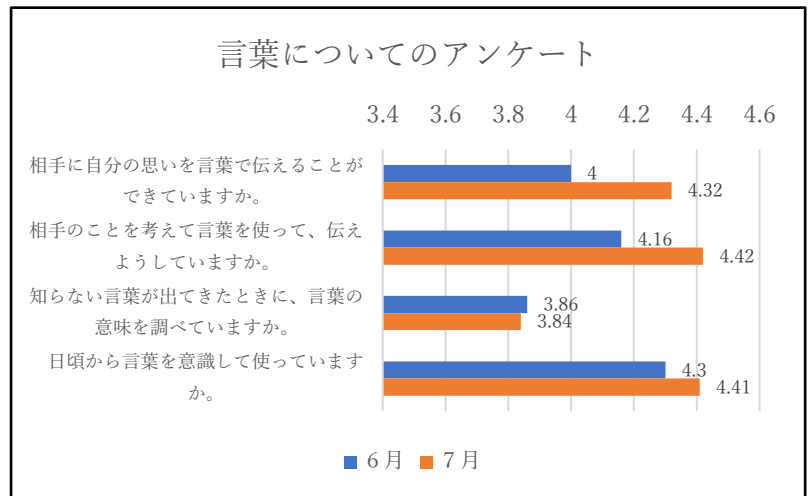
毎時間の授業の終盤に、学んだことや心に残ったこと、前場面と比べての主人公の変化、他者の意見から気付いたことなどを文章で書かせた。また、振り返りの内容は折にふれ全体に紹介し、学習への意欲向上につなげていった。



【資料3：ノート】

④ 考察

児童の言語活動についての意識を調べるために5段階でのアンケートに答えてもらい、6月と7月の平均値を比較した【資料4】。「相手に自分の思いを言葉で伝えることができますか。」「相手のことを考えて言葉を使って、伝えようとしていますか。」「日頃から言葉を意識して使っていますか。」という質問に對しての平均値には伸びが見られた。これは、言葉について動作化やワークシート、振り返り等で考えることを通して、語感が磨かれ、言葉への意識が高まることにつながったからだと考える。



【資料4：言葉についてのアンケート】

しかし、「知らない言葉が出てきたときに、言葉の意味を調べていますか。」の質問は、3.86から3.84に下がっており、知らない言葉を調べようという意欲にはつながらなかった。国語辞典やタブレット端末等を使って言葉の意味や使い方について調べる取り組みをすることで、言葉への意識がより高まったと感じた。「振り返り」では、書く文章量に変化が見られた。場面ごとの振り返りで、1場面の振り返りの量はクラス平均4.44行だったのに対し、最終場面では8.67行と、およそ2倍になり、明らかに書く量が増えている。これは、授業が進むにつれて書くことに慣れ、たくさん書きたいという思いが高まったのだと考えられる。今後は、量だけではなく質を高めることにも重点をおいていきたい。また、「〇〇さんの意見から私は～と思った。」「〇〇さんの意見が心に残った。」など、他者の考えと関連づけた振り返りが増えた。4月下旬にあった言葉のトラブルは6月～7月には減少し、他者に優しい声かけをする児童も増えた。言葉のもつ意味を考え、相手の言葉を大切にしようとする土壌が育ってきたと感じる。

(2) 東部小学校 5年生 (中心実践②)

① 児童の実態

5月上旬に行った言葉についてのアンケートでは、「相手に自分の思いを伝えることができますか」という質問に對しての平均値が3.9であり、自分の思っていることを伝えられる児童が多くいることが分かる。一方で、「相手のことを思って伝えようとしていますか。」「日頃から言葉を意識して使っていますか。」という質問の回答は、平均値3.1・3.0であった。このことから、自分の思っていることは伝えられているが、相手のことを考えた

言葉選びや伝え方ができている児童は少ないという実態が分かった。

② ねらい

「相手のことを考えた言葉選びや伝え方ができる児童は少ない」という児童の実態から、場や相手に応じた言葉を選べるようになること、相手の気持ちを想像できるようになることが大切であると考えた。そこで、相手のことを考えて伝えられる児童を増やしていくために、自分だったらどう行動するかを考えたり、役割演技をしたりすることで、伝え方や登場人物の気持ちを想像させる機会を作ることにした。

③ 実践 道徳 単元名「SNS いじめ」

「SNS いじめ」は、友達が不快に思うようなことを「わたし」がうっかりつぶやいてしまったことをきっかけに、SNS で匿名の自分から悪口が届くようになる話である。「わたし」は、「心配をかけたくないから」「自分にも非があるから」という感情によって、一人で悩み続けてしまう。言葉を発信する側の気持ち、受け取る側の気持ちをそれぞれの立場で考えさせることをねらった教材である。

導入では、友達に言われてうれしい言葉と嫌な言葉について考えた。そして、場面や登場人物の気持ちを読み取りやすくするために、場面を区切りながら音読をした。次に、SNS でいじめが起きてしまったときに相談できなかった理由を考えた。「自分なら相談することができたのか。」という切り返し発問をすることで、登場人物の気持ちになって考えられるようにした。

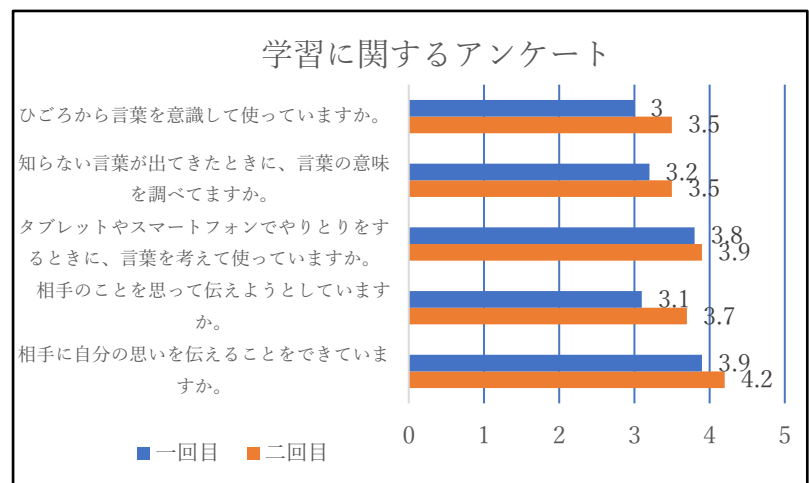


【資料5：役割演技している様子】

その後、もし「わたし」に相談されたら自分はどうするか考え、考えたやり方を「わたし」側と相談に乗る側に分かれてペアで役割演技を行った【資料5】。自分に置き換えて考えたり、役割演技をしたりすることで、「わたし」の置かれている状況や「わたし」の気持ちを想像することができた。また、振り返りでは、「自分が言われて嫌だと感じる言葉は使わないようにしたい。」や「ふわふわ言葉を使っていきたい。」と書いている児童も見られ、場や相手に応じて適切な言葉で伝えたいという意欲を高めることにつながったと考える。

④ 考察

5月下旬に行ったアンケートと7月中旬に行ったアンケートを比較した【資料6】。アンケート結果を比較すると、「相手のことを思って伝えようとしていますか。」「日頃から言葉を意識して使っていますか。」という質問に対して児童の回答の平均値が3.7と3.5であり、それぞれの項目の平均が上がったことがわかる。



【資料6：学習に関するアンケート】

り、それぞれの項目の平均が上がったことがわかる。これは、自分だったらどうするかを考えたり、実際に役割演技したりすることで、伝え方を考えることや、相手の気持ちを想像することにつながり、場や相手に応じて適切な言葉で伝えたいという気持ちを育てるこ



とにつながったと思う。このことから、相手のことを考えて自分の思いを伝えたいという児童が増えたのではないかと考えられる。

場や相手に応じて適切な言葉を使いたいという意欲を高めることはできた一方で、実際にどんな言葉を使うといいのか、伝えている言葉が相手にどう受け取られるのかなどを考えることができなかった。意欲付けはできたが、深める活動を行うことができると、よりねらいに迫れたのではないかと感じた。そのために、言葉の伝え方を考える活動や登場人物の気持ちを想像させる活動に加え、適切な言葉の使い方や自分が伝えた言葉を相手がどう受け取っているのかを考える活動を行うことで、より場面や人に応じて適切な言葉を使える児童が増えていくのではないかと考えた。

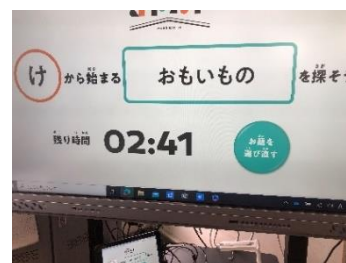
### (3) 南部小学校 5年生

<ねらい>

ゲームの要素や思考法を学習に応用することで、まるでゲームのような楽しさを創出しようとするゲーミフィケーションという活動の中で、国語辞典や漢字辞典を使い、日常ではあまり使わない言葉を身に付けさせ、語彙を増やしていく。

<実践内容>

国語科の授業の導入で、教員が指定した語句を、漢字辞典を使って調べさせた。見つけた児童は席を立ち、同じグループの友達に探し方のヒントを与えさせた。全員が調べ終わったところで、漢字辞典に記載してある言葉の意味や、使い方を声に出して読ませた。また、それと同じく、国語科の授業の



【資料7：コトバトの画面】

際に、「コトバト」という取り組みを行った【資料7】。「【け】から始まる、おもいもの」など、お題を最初に与え、国語辞典を使ってお題に合う言葉を調べさせた。なぜその語句を選んだのかをグループ内で発表し、グループの代表にクラス全体の前で発表させた。

<結果>

漢字辞典を使うことで、普段使っている言葉でも知らなかった意味や使い方を学ぶことができ、子どもたちも意欲的に活動していた。国語辞典で普段使わない言葉を調べ、発表することで、教科書や本の中で知らない言葉が出た際に、自ら調べる児童が増えた。

### (4) 草木小学校 特別支援学級

<ねらい>

登場人物の行動や発言から、心情を想像したり情景を思い浮かべたりして、言葉のもつ意味を深く考える。言葉と簡単な動作のある音読劇をすることを通して、登場人物になりきって言葉を使う練習をする。



【資料8：音読劇の様子】

<実践内容>

国語科の授業で、意味が分からない言葉の一つずつ取り上げて、その言葉の様子がどんな感じなのかを話し合ったり体を動かしたりして、言葉の意味を深く考えた。それらの言葉を使って、音読劇を行った【資料8】。振り返りの場面では、日頃は自分の気持ちを相手に伝えることが苦手な児童が多いが、自分の立てためあてを振り返るとともに、できたことを人前で元気よく発表する姿が見られた。日常生活の中でも自分の言葉として使えるようになることを目指し、国語科の指導を継続していきたい。

(5) 阿久比中学校 特別支援学級

<ねらい>

小学生を対象に「光るバルーンスライム」の制作方法を説明する活動を通して、伝わる言葉や表現方法を考える。そして、他者に聞いてもらうことで伝え方や表現方法を改善していく。



【資料9：原稿作成の様子】

<実践内容>

本単元の導入では、交流会で小学生に「光るバルーンスライム」の制作方法を教えることを生徒に伝えた。生徒に小学生の気分になりきって説明書を読ませて、漢字が多いことや、用語が難しいことなど、原文だと小学生には難しいことを気付かせた。

辞書を使って表現を変えたり、友達に聞いてもらいながら言い直しを変えたりして、小学生にも手順が理解できるように発表原稿を作成している様子が見られた【資料9】。試しでスライムの制作したときに撮った写真と発表原稿を対応させながら、簡単に伝わることを意識したスライドも制作し、発表練習を行った。

#### 4 研究の成果と今後の課題

##### (1) 研究の成果

仮説1について、言葉を動作化させたり、音読劇をさせたりすることで、児童の言葉に対するイメージが膨らみ、楽しく意欲的に活動を行うことができた。また、言葉と動きがリンクし、言葉の意味を正しく捉えさせることができた。辞書を用いて、言葉の意味や使い方を調べさせる取り組みを継続的に行うことで、自ら言葉を調べようとする児童・生徒が増えた。継続的な振り返りを行い、他者の意見に触れることで、自分の学んだことや気付いたことを言葉で表現できるようになってきた。

仮説2について、相手のことを思った言葉選びや伝え方を考えて役割演技をすることで、場や相手に応じて適切な言葉を使いたいという意欲を高めることができた。また、「他者に説明を聞いてもらう」という他者意識があることで、伝わる言葉や表現方法を改善しようとする意欲につながった。

##### (2) 今後の課題

仮説1について、ワークシートによって多くの言葉に関心を持ち知ることはできたが、言葉の意味や使い方まで考えることには至らなかった。知った言葉を実際に使ったり、使って感じたことを伝え合ったりするなどの活動ができるとよいと感じた。また、言葉の動作化は有効ではあったが、それに加え、なぜその動きをしたのかと問いかけたり、動作化をしてみても改めて気付いたことなどを問いかけたりすることができれば、言葉により注目できるようになったり、考えを深めたりすることができたと考える。

仮説2について、役割演技をしたり、伝え方を考えたりすることで、場や相手に応じて適切な言葉を使いたいという意欲を高めることはできたが、実際にどんな言葉を使うといいのか、伝えている言葉がどう受け取られるのかなどを考えるとところまでは至らなかった。適切な言葉の使い方や自分が伝えた言葉を相手がどう受け取っているのかを考える活動を行うことで、より場面や人に応じて適切な言葉を使える児童が増えていくのではないかと考える。